

重要聖句：ガラテヤ人への手紙2章20節 - 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

お早うございます、皆さん。皆さんに、また会いできて嬉しいです。今日のメッセージのタイトルは、「真の靈性」です。このタイトルは、以前にも何度かご紹介した、私のお気に入りの作家の一人が書いた本から取りました。フランシス・シェーファー師です。彼は、私が20代の頃、とても好きなクリスチャンの作家で、彼の本は、私の人生のある部分を形成するのに役立ちました。

彼の「真の靈性」という本は、多くの意味で、私のクリスチャン生活の原動力を概要していますので、私は今日、その本の基本的な考え方を皆さんと分かち合いたいと思います。この本は、フランシス・シェーファー師が1950年代に、深い精神的苦悩を経験し、キリスト教信仰とキリスト教宣教へのアプローチ全体を再考した後に始めた宣教の原動力を、多くの意味で概説しています。アメリカで10年間牧師として、ヨーロッパ（スイス）で5年間宣教師を務めた後、彼は自分自身の生活と仲間のクリスチャンの生き方、宣教の仕方に問題があることに気付き始めました。聖書がクリスチャンの生き方について述べていることが、自分自身や同時代の人々の生き方にあまり反映されていないということでした。霊的な危機を感じ、聖書を調べ、キリスト教生活へのアプローチを考え直した後、彼は宣教団体を離れ、スイスで全く新しいミニストリーを開始しました。彼はこのミニストリーを「ラブリ・フェローシップ」と名付けました。「ラブリ」とは、フランス語で「避難所」という意味です。彼は、このミニストリーを、クリスチャンもノンクリスチャンも共に質問し、聖書から確かな答えを得ることができる避難所のような場所にしようと考えました。現代の哲学や懐疑論は、キリスト教信仰に対してさまざまな挑戦を投げかけています。シェーファー師は、このミニストリーを、人々が率直な疑問に対する正直な答えを見つけることができる場所として設計しました。スイスのラブリ・フェローシップやイギリスの第二支部には、多くの人々が訪れ、そこで助けを得ています。私自身、1986年と1991年の2回、イギリス支部に留学し、そこで自分のキリスト教生活の基礎を固めることができました。

シェーファー師が著書で述べた「真の靈性」の枠組みを紹介する前に、彼の最も有名な講義の一つを紹介したいと思います。この講義では、彼の宣教の基本的な基礎概念を概説しており、私にとって、これがあらゆるキリスト教の努力にとって良い土台となるように思えるからです。この講義は「二つの内容、二つの現実」と題されています（「教会における形と自由」という別の題もあります）。この講義のテキストはオンラインで見ることができます（例：<https://lausanne.org/content/form-and-freedom-in-the-church>）。シェーファー師のミニストリーの基礎となる、二つの内容と二つの現実をお話ししましょう。

第一の内容はこれです：健全な教義。聖書は、人間に対する神の靈感に基づく、誤りのない言葉です。聖書は私たちに対する神の言葉であり、それは神についての知識の源であり、私たちは聖書の中の中心的な教えに立たなければなりません。私たちは、聖書がこれより劣るものであると言うような、いかなる自由主義的神学も拒絶しなければなりません。

テモテへの手紙 第二 3 章 16 - 17 節 - 「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」

第二の内容は、先ほど申し上げたものです：正直な質問に対する正直な答え。聖書からの思慮深い答えです。あまりにも多くの場合、クリスチャンは人々が抱く難しい質問に答えることを望んできませんでした。クリスチャンもノンクリスチャンも、深く悩むような質問をすると、次のように言われることがあまりに多いのです。「質問せず、ただ信じなさい」と言われることがあります。私は、それは助けにならず、また無責任だと思います。ラブリー・フェローシップは、すべての正直な疑問に対して、愛と尊敬の念を持って対処し、聖書の洞察をもって答える場所として設立されたのです。

ペテロの手紙 第一 3 章 15 節 - 「むしろ、心の中でキリストを主としてあがめなさい。そして、あなたがたのうちにある希望について説明を求める人には、だれにでもいつでも弁明できる用意をしておきなさい。しかしやさしさと尊敬をもってしなさい。」

二つの内容。二つの現実。

第一の現実は、これです：真の霊性。これは、フランシス・シェーファー師が、キリスト教生活とキリスト教宣教へのアプローチに疑問を感じていた人生の問題時期に発見したものです。これが今日の私の説教の主題であり、すぐにこの話に戻ります。

ガラテヤ人への手紙 2 章 20 節 - 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

第二の現実は、人間関係の美しさです。キリスト教は単なる真理ではなく、美しさでもあるのです。そして、この地上において、人間関係ほど大切なものはありません。聖書は、男性も女性も神に似せて造られたと教えています。私たちは神の創造の中で、それぞれユニークで特別な存在です。現代人はこの真理から遠ざかり、人類は下等な生命体から進化した、ただの動物の一種だと言いたいのでしょうか。いいえ、私たちはこの考え方に反対です。男性と女性は神に似せて造られ、神との関係を持ち、また互いに関係することができ、すべての人間は、神の目にユニークで特別な存在であり、私たちから見ても特別であるべきなのです。

創世記 1 章 27 節 - 「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」

以上が、フランシス・シェーファー師の二つの内容と二つの現実についての簡単な説明です。次に、シェーファー師の考える「真の霊性」についての説明に移りたいと思います。

以下、本日のメッセージの概要です：

- 第1部 - 靈的生活の出発点
- 第2部 - 律法主義への警戒、反律法主義への警戒
- 第3部 - 神の律法の核心
- 第4部 - 拒絶され、殺され、よみがえらされた

まず、第1部「靈的生活の出発点」を見てみましょう。

まずクリスチャンにならなければ、キリスト教的な意味での真に靈的な生活を送ることはほとんどできません。では、どのようにしてクリスチャンになるのでしょうか。クリスチャンの家庭に生まれ、クリスチャンの環境で育てられればいいのでしょうか。いいえ、そうではありません。キリストへの道を示すには役に立つかもしれませんが、それだけではクリスチャンにはなれません。

良い生活や良い行いをしようとすることはどうでしょうか。繰り返しますが、新約聖書のページに書かれていることによれば、これはクリスチャンになるための方法ではないのです。

クリスチャンになる方法は、キリストを救い主として受け入れることです。ヨハネの福音書1章12節 - 「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。」

コロサイ人への手紙2章6節 - 「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい。」

ヨハネの福音書14章6節 - 「イエスは彼に言われた。『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』」

クリスチャンになる方法は、イエスを受け取り(receive)、彼を受け入れ(accept)、彼を信じることです。そして、イエスは父なる神への唯一の道なのです。私たちは、信仰の扉を通してイエスのもとに来るのです。

ヨハネの福音書3章16節 - 「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは、御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

私がキリストを受け入れるに至った経緯を少しお話ししましょう。私が子供の頃に通っていた素晴らしい日曜学校と、母が息子たちを通わせていた素晴らしい夏期キリスト教教育プログラムについては、以前にもお話ししました。そこで私は聖書の全容を徹底的な説明を受けました。このインプットはとても重要でしたが、福音書の物語を知るだけでは十分ではありません。10代の頃、私はその時に聞いた大切なことを思い出しました。それは、キリストに従うかどうかを自分自身で決断しなければならない日が来るということです。クリスチャンの環境で育てられるだけでは十分ではありません。ある説教者がこう言っているのを後で聞きました。「自分のものにしなければならぬときが来る」この福音のメッセージを自分のものにする、その中に自分の信仰を置くと決める必要があるのです。私は10代の頃、この原則を思い出しましたが、さまざまな理由から行動に移すことをためらいました。

大学時代、キリスト教が真実かどうかという疑問と格闘した末に、私はついに自分自身の決断を下しました。その頃、キリスト教に対してしばしば提起される様々な疑問に答える有用な弁証論の本をいくつか読んでいました。それらの本は、信仰への障害を取り除くのに役立ち、ある程度は役に立ちました。しかし、私は、キリスト教が真実であることを知的に説得されるだけでは十分でないことに気づきました。キリスト教が真実であるという知的な同意だけでは、神との正しい関係に至ることはできません。私は自分が罪人であり、悔い改めてキリストに信頼する必要があることを強く自覚していました。その頃、私がとても驚いたのは、私たちがどこから来たのか、なぜ私たちはお互いに、また自分の心の中に多くの問題を抱えているのか、なぜ私たちの周りの世界に多くの問題があるのか...そして聖書は私たちの問題に対する解決策を教えてくれる、という人生の基本的な疑問に対して、聖書がとても多くの答えを持っているということです。私がキリストを救い主として受け入れ、彼に信頼を置いたのは、大学2年の棕櫚の日曜日でした。

私たちが救われるのは、信仰の扉によるのです。私たちの行いによってではありません。教会に行くことでもありません。このメッセージは真実であるという知的な同意によってでもありません。神との関係を回復するために、神ご自身が解決策を提供されたのです。先月のイースターの日曜日に説明したように、神は御子をこの地上に送り、私たちの罪のための犠牲とされたのです。フランシス・シェーファー師はこのように表現しています。

すべての人は、真の道徳的罪によって神から切り離されています。神は存在し、神は人格を持ち、神は聖なる神で、人が罪を犯すと、存在する神の前で真の罪の意識を持ちます。歴史、空間、時間の中で、神の子羊としてキリストが十字架上で身代わりの業だけが、これを取り除くのに十分です。三位一体の第二位であるキリストの完成された御業の無限の価値と、私たちの側には何も無いことが、私たちの罪を取り除くきます。こうして、私たちが神を信じるようになると、聖書は私たちが神によって義と認められたと宣言しています。そして、私たちは神との交わりに戻されます。まさに私たちが造られた最初の目的に戻れます。

私たちの罪が取り除かれる唯一の根拠が、歴史におけるキリストの完了された御業であり、それ以外に何も無いように、キリストの十字架上の完成された御業を受け入れる唯一のものは信仰なのです。

ここには、覚えておくべき重要な言葉があります。私たちの罪が取り除かれる根拠は、キリストが十字架上で完了された御業です。イエスが十字架上で最後に言われた言葉を思い出してください。「完了した」（ヨハネ 19：30）。そのキリストの御業に、私たちは何も付け加えることはありません。私たちは、ただ信仰によってそれを受け入れるだけです。フランシス・シェーファー師が1950年代に精神的な危機に陥ったとき、非常に感銘を受けたのは、この十字架上のキリストの完了された御業でした。私たちはその完了された御業に安住し、それをこれからの人生の土台とし、それに基づいて人生を生きていくのです。

このフランシス・シェーファー師のもう一つ注目したい言葉があります。彼は、「私たちがこうして神を信じ、（キリストのもとに）来たとき、聖書は私たちが神によって義とされたと宣言され、罪がなくなると言っています...」と言いました。義と宣言される。これは私たちが「義認」と呼んでいる教義です。これは、キリストに信頼を置くある瞬間に起こることです。

もう一つ、強調しなければならない重要な言葉があります。それは「聖化」です。これは一回限りの出来事ではなく、プロセスです。義認がある瞬間に起こるのに対して、聖化は

一瞬一瞬のクリスチャン生活を営むことです。シェーファー師の言葉をもう一度引用しましょう。

私たちは、キリストを救い主として受け入れたので、クリスチャンになったのだと考えてはなりません。私たちが（肉的に）生まれた後、重要なことは、その関係、可能性、そして能力のすべてにおいて、私たちの人生を生きることなのです。霊的な新生もまったく同じです。ある意味では、新生は私たちの霊的生活において最も重要なことです。なぜなら、私たちはこのようにならなければクリスチャンではないのですから。しかし、別の見方をすれば、クリスチャンになった後は、新生だけを常に意識してはいけないという意味で、最小限に抑えなければなりません。霊的に生まれた後に大事なことは、生きることです。新生があり、そしてクリスチャンとしての生き方がある。新生してから、この世を通して、イエスが来られるまで、あるいは死ぬまで、聖化という領域がこれです。

「聖化」という言葉は、「sanctify」という言葉からきており、基本的には「聖なるものにする」という意味です。聖なるものとは、この世から切り離され、神に捧げられることを意味します。聖化では、聖霊の力によって、私たちは生活の中で罪に打ち勝ち、キリストに似た者となることができます。レクシャム・サーベイ・オブ・セオロジーは次のように言っている。

聖化とは...単に倫理的な適合ではなく、全人生を神の姿に適合させることである。クリスチャンは、神を喜ばせ尊ぶ良い行いをし、人を愛し仕え、神のご性質と方法をこの世に表すことができるようになるのです。

テサロニケ人への手紙 第一 5 章 23 節 - 「平和の神ご自身が、あなたがたを全く聖なるものとしてくださいますように。主イエス・キリストの来臨のとき、責められるところのないように、あなたがたの霊、たましい、からだを完全に守られますように。」

テモテへの手紙 第二 2 章 21 節 - 「ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの（聖別された）、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」

コロサイ人への手紙 1 章 10 節 - 「また、主にかなった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。」

先ほども言いましたが、聖化とは、クリスチャン生活を一瞬一瞬、生きていくことです。このプロセスは、実は天国に到達するまで完了しません。完璧にできるわけではありませんから、完璧になろうとしないで、聖霊の助けによって、前進することができます。要は、福音に忠実な生活を、日々続けていくことが大切なのです。

次に、今日のメッセージの第 2 部に移りたいと思います。フランシス・シェーファー師は、キリストを受け入れた後の人生について、人々がアプローチしてきたアンバランスな方法について、続けて述べています。

第 2 部 - 律法主義への警戒、反律法主義への警戒

多くのキリスト教グループでは、この世の道から離れた聖なる生活を送りたいと願うクリスチャンたちが、聖なる、神を敬う生活を送るために守るべきと考える「すべきこと」と「してはいけないこと」のリストを作成します。例えば、禁煙、禁酒、禁ダンス、禁映画、などなど。このような律法主義について、シェーファー師はこのように言っています。

しばしば、人が新生した後、...その人は、通常は限られた性質の、主に否定的な事柄のリストを与えられます。しばしば、この一連のことをしなければ、霊的になれるという考えを与えられます。これはそうではありません。真のクリスチャン生活、真の霊性とは、単に否定的なことをしないことではありません。たとえそのリストが、その特定の歴史的環境において注意すべきことの非常に優れたリストとして始まったとしても、キリスト教生活、すなわち真の霊性は、ある外的なタブーのリストを機械的に控えること以上のものであることを強調しなければなりません。

このことは真実ですから、ほとんどの場合、そのようなタブーのリストに反対して立ち上がり、活動を開始する別のクリスチャンのグループが存在するようになります。...これらのグループの両方は、彼らが問題にアプローチする方法に応じて、正しいとも、両方が間違っていることも可能です。

シェーファー師は、もともと厳格な教団に所属しており、世俗やその墮落した影響から切り離された生き方として、こうしたリストを重視していました。しかし、1950年代に精神的な危機を迎えたとき、彼はこのような律法主義的なシステムの弱点に気づき、これらのタブーの多くを敬遠するようになったのです。しかし、そのようなことをするときには、真の聖書の生き方とは何であるかを心に留めなければなりません。私たちは律法主義的な規則に従う必要はありませんが、そのような律法主義を拒否するにあたっては、注意しなければなりません。シェーファー師は続けます。

しかし、そのようなリストを手放すこと、「リスト」的な考え方の限界を感じることは、それは単にだらしな生活をするためだけであってはならない、もっと深い何かのためでなければならないことを見なければなりません。だから、私はどちらの意見も正しいし、どちらの意見も間違っていると思います。私たちは、リストを守るだけでは真の霊性や真のクリスチャン・ライフには到達しませんが、リストを拒否することによっても到達しないのです。

私が成人した1970年代、ジョン・マッカーサー師をはじめとする多くの説教者が、この種のリストを批判しているのを耳にしました。私は当初、律法主義的なクリスチャンに対して悪い態度をとっていました。しかし、マッカーサー師、そしてシェーファー師がローマ書14章を指し示してくれました。今日はこの章を詳しく読む時間はありませんが、使徒パウロは、ある律法主義的な規則を守っているクリスチャンを批判しています。しかし、パウロは、彼らが神を敬いたいと願っていることは、良い動機であると述べています。しかし、パウロは、そのような規則をわざと破って、兄弟の感情を害するようなクリスチャンを批判しています。そのようなことをするのは、愛の律法に従って歩んでいないのです。例えば、あるクリスチャンは、ある食べ物を控えるというタブーに従いたくないので、その行為がクリスチャンの兄弟の心を悩ますかもしれないということを考えないで、ある食べ物を食べてしまうかもしれません。これは、あなたの兄弟が主とともに歩むことを妨げることになりかねません。

パウロはローマ人への手紙14章15節でこう言っています - 「食べ物の中で、あなたの兄弟が心を痛めているなら、あなたはもはや愛によって行動しているではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物の中で、滅ぼさないでください。」

キリストが死んでくださった人を、あなたの食べ物の中で、滅ぼさないでください。

もしあなたがそのような律法主義的な、すべきことやしてはいけないことのリストに従わないと決めたとしたら、兄弟姉妹の信仰を傷つけたり、乱したりしないような方法でそうすべきなのです。

そして、もしそのようなリストを捨てるとしたら、代わりにどのような規則に従えばいいのでしょうか。

それが、私のメッセージの次の部分です。

第3部 - 神の律法の核心

私たちは、それらの人間が作った律法主義的な規則に従う必要はありません。しかし、それらを投げ捨てたとき、私たちには何が残るのでしょうか？

答え：

十戒

そして、先ほど引用したローマ人への手紙 14:15 のような節で表現されている「愛の律法」です。また、ローマ人への手紙 13 章 8 節には、「互いに愛し合うこと以外には、何ものも負うべきでない。」とあります。

十戒.....そして、愛の律法

皆さんは十戒をよくご存知でしょう。

出エジプト記 20 章を見てみましょう。まず、2 節と 3 節から始めましょう。

2 節 - 「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した。あなたの神、主である。」

第一戒：3 節：あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。

第二戒：4 - 6 節：偶像を造ってはならない。

などなど。

第十戒：17 節：「あなたは隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ロバ、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」

もう一度、第十戒：「あなたは、...を欲しがってはならない。」

欲しがってはならない。

「covet（むやみに欲しがる）」とはどういう意味でしょうか？何かを過剰に欲するという意味です。欲望すること。何かを切望すること。それは内的な衝動です。あなたの心の中にあるものです。この最後の戒めでは、隣人の家、妻、召使い、あるいはその人の所有するものを所有することを切望してはいけないと教えています。このように自分のものでないものを欲しがることも、神が十戒の中で明確に禁じている罪です。神は、ある行為を禁じる命令のリストを与えているだけでなく、こうした内なる渴望も禁じておられるのです。

フランシス・シェーファー師の話に戻りましょう。それらのタブーリストについての議論の最後に、彼はこう言っています。

しかし、結局のところ、キリスト教的な生活や真の霊性は、外側に向かうものではなく、内側に向かうものと見なされるのです。十戒のクライマックスは第十戒である・・・欲しがらないという戒めは全く内面的なものである。...これが十戒の中で神が私たちに与える最後の命令であり、したがって全体の問題の中心であるということは、興味をそそる要素であ

る...”

これが、すべての問題の中核です。心の問題なのです。これは、マタイによる福音書の「山上の垂訓」でイエスが語っていたことを思い起こさせます。

マタイの福音書5章21-22節 - 「昔の人々に、『人を殺してはならない。人を殺する者はさばきを受けなければならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。22しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟に向かって腹を立てる者は、だれでもさばきを受けなければなりません。兄弟に向かって『能なし。』と言うような者は、最高議会議に引き渡されます。また、『ばか者。』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。

27-28節 - 「『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。28しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」

兄弟に腹を立てることは、殺人に等しい、また、女性を欲情して見ることは、姦淫に等しいのです。私たちの中で、これらのことに罪を犯している人がどれだけいるのでしょうか。禁じられているのは外側の行為だけでなく、内なる渴望も神の前の違反であり、私たちに罪を犯させるものなのです。神は私たちの行動だけでなく、内なる動機、心の渇きも気にされます。

イエスはマルコの福音書7章20-23節でさらに述べています- 「また言われた。『人から出るもの、これが、人を汚すのです。21内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、22姦淫、食欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさである、23これらの悪はみな、内面から出て、人を汚すのです。』」

神は私たちの心を本当に大切にされています。私たちは、その心を守るために注意しなければなりません。箴言4章23節「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。」

危機的状況にあったフランシス・シェーファー師が、自分自身の人生や同時代の人々の人生に現実味の欠如を感じていた理由を理解したのは、このような洞察によるものだったのです。彼らは、正しい心を持たず、聖霊の力もなく、外的な「すべきこと」「してはならないこと」のリストに従っていたのです。真のキリスト教の愛が欠けていたのです。そして、神の存在やキリスト教の福音に関する同世代の厳しい問いかけに答えていなかったのです。彼は、今日私が説明した原則を理解することによって、自分の人生と宣教の優先順位を見直したのです。そして、彼の世代と私の世代の数え切れないほどの人々が、クリスチャンとしての生活をしっかりとした土台の上に置くことができるように助けてきたのです。

本日のメッセージの最終回に移りましょう。

第4部 - 拒絶され、殺され、よみがえらされた

この言葉を聞くと、もちろん、イエスとその地上での働きの最後の数週間のイメージが湧いてきます。ルカの福音書9章22節で、イエスが弟子たちに言われたことを見てみましょう- 「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ

（拒絶され）、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」
宗教指導者たちに拒絶され、多くの民衆からも拒絶された。
宗教指導者たちの要求で、ローマ人によって殺された。
三日目によみがえった。

これは、イエスが地上で過ごした最後の数週間の概要です。しかし、イエスに従う私たちの人生にも、このアウトラインと同じようなことが言えるのです。では、読み進めていきましょう。

ルカの福音書 9 章 23 - 24 節 - 「イエスは、みなの方に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。24 自分のいのちを救おうと思う者は、それを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを救うのです。」

私たちがイエスに従おうと願うなら、拒絶されることがあります。新約聖書のいくつかの箇所、イエスに従う者たちが福音を宣べ伝える際に、人々から拒絶されることに直面することが書かれています。しかし、ルカ 9 章のこの箇所では、このような拒絶はありません。23 節に、キリストに従おうとする者は「自分を空しくし（捨て）なければならぬ」と書かれています。私たちは自分自身の野心をはねつけ、私たちの生活の中で罪をはねつける必要があるのは確かです。

テトスへの手紙 2 章 12 節 - 「私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、」

ローマ人への手紙 6 章 19 節 - 「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」

自己を捨てて、古い人生を捨てること。そしてまた、死です。ルカの福音書 9 章 23 - 24 節には、「日々自分の十字架を負い」、「キリストのために自分の命を失うなら、それを救う」とあります。

ガラテヤ人への手紙 6 章 14 節 - 「しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。」

しかし、イエスの死が物語の終わりではなかったように、それは物語の終わりではないのです。

ガラテヤ人への手紙 2 章 20 節 - 「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」

私たちは「キリストとともに十字架につけられた」のです。そして今日、私たちはまだこの体の中で生きていますが、それはキリストが私たちを通してご自分の命を生きておられ、私たちは神の御子を信じる信仰によってこの地上での生活を送っているのです。

ローマ人への手紙 6章 3-4節 - 「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたのではありませんか。4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」

私たちは、キリストとともに「葬られた」のです。これは、私たちのバプテスマによって描かれています。私たちはまた、キリストとともに「よみがえった」のです。そして、キリストの姿にますます似せて、新しい人生を歩むのです。これこそ、私たちがクリスチャンとして歩むべき人生の本質です。罪と自己から死に、キリストを尊ぶ新しい人生へとよみがえります。

今日の説教の最後に、フランシス・シェーファー師の言葉を紹介します。

拒絶され、殺され、よみがえらされたのです。この順序は、拒絶され、殺され、よみがえらされる、という3つの段階から成っています。これは、イエスが来たるべき唯一の、身代わりの死を語っています。拒絶され、殺され、よみがえらされたという順序は、真の霊性を持つクリスチャン生活の順序でもある.....。キリストの拒絶と死が贖いの秩序の最初のステップであるように、私たちの物と自己に対する拒絶と死が、真の成長する霊性の秩序の最初のステップなのです。